

関連学会の紹介—日本第四紀学会 (Japan Association for Quaternary Research)

日本第四紀学会は、もっとも新しい地質時代である第四紀を対象とする研究者の交流および第四紀の総合的な研究と理解を目的として1956年に設立された。したがって、今年で創立31周年ということになる。年1回の大会が開催され、学会機関誌「第四紀研究」が年4号発行されている。機関誌の名にある第四紀研究は、境界領域の研究に対する関心の高まりとも関係して広領域の研究者によってささえられている。現に日本第四紀学会は、学会の活動・運営上11部門(地質学、地理学、古生物学、動物学、植物学、土壌学、人類学、考古学、地球物理学、地球化学、工学)を設定し、部門毎の正会員数を考慮して評議員を選出するようにしている。現在の正会員は約1700名である。

本学会の前身ともいえる「日本学術会議地質学研究連絡委員会第四紀小委員会」は、国際第四紀学研究連合会議(INQUA: International Association for Quaternary Research)と日本の学会とを結ぶ窓口として設置されたものである。この小委員会は1950年11月に設置案が可決され、翌1951年に東京で、また1952年には関西で具体的な活動を開始した。1952年から日本第四紀学会が設立された1956年までにNo.1~12の連絡紙(No.1~9はINQUA日本支部連絡紙、No.10~12はNEWS BULLETIN-JAPANESE BRANCH OF INQUA)を刊行した。この委員会には世話人あるいは常任委員として三木 茂・巨理俊次両氏が加わっておられた。そのためか、関西 INQUA 支部第2回例会では、藤田和夫:西宮甲陽園付近の植物化石層の horizon と堆積状況、吉良龍夫: A Comparative Study of Japanese Pollen Records (by Jun NAKAMURA) の紹介と批判、上野実朗:花粉分析の参考書及論文の紹介、春成兼俊:南九州開聞岳付近の植物化石層、の4件もの報告がされている。また東京での第3回談話会でも巨理俊次:出土木材からみた越中・越後平野の森林と題する報告がされた。1955年5月14日には、日本学術会議第四部主催の「気候変化に関するシンポジウム」が開かれ、三木 茂:植物遺体の組成状況からみた鮮新世以来の気候の変化と題する話題提供があった。この要旨はNEWS BULLETIN No.11に収録されている。このシンポジウムは翌年が第四紀学会創立の年であることから、設立に向けてのアピールと受け取ることができる。

日本第四紀学会大会では創立以来、植生史に関する研究発表は絶えることがなく、むしろ増加の傾向にある。大会ではほとんどの場合1日かけたシンポジウムが開かれる。シンポジウムのテーマは大会の開催地の地理に即したものから第四紀学の総合的な問題を対象としたものまで多様であるが、いずれも第四紀学の主要課題である第四紀層序・編年、環境変動論、地殻変動論、動植物相の変遷に関するものである。植生史に関するものでは、1965年のパリノロジー、1980年の最終氷期における日本の動植物相と自然環境、の二つが重要なものである。その他、寒冷気候にまつわる諸問題(1973)、第四紀における動植物界と環境の変遷(1974)、日本考古学と第四紀研究(1982)、中部日本における後期更新世の諸問題(1985)などで話題提供されている。1980年代に入って、遺跡発掘に関連する話題も増えてきた。これは急増する遺跡発掘とそれに伴う自然科学方面からの研究の機会が増えたことを示すものであろう。ちなみに、本年の神戸大会のシンポジウムのテーマは、陸の古環境復元とされ、鈴木・能城:低地の遺跡にみる2種類の木材遺体群集、辻:低地の遺跡発掘と古環境復元、の2つの植生史関係の話題提供が含まれている。

年大会のほかに、日本第四紀学会講演会が開催される。これは年大会以外に開かれる評議員会に合わせ開かれるもので、すでに3回行われた。今年1月に開かれた第3回講演会は植生史に関するもので、鈴木敬治氏の会津盆地周辺の鮮新・更新統と古植生の時代的変遷と題したものであった。

機関誌「第四紀研究」には、一般投稿論文とシンポジウムで提出された論文が掲載される。シンポジウムの論文は通常第3号に収録されることになっている。植生史に関する論文はほとんど毎号に掲載され、多いときには掲載論文の大半を占めることもある。大会での一般研究発表も含め、発表される論文の内容をみてみると、大型植物遺体を対象とするものと花粉化石を対象とするものが大半を占める。前者は主にフローラに重点を置き、後者は主に時系列解析による植生変遷や気候変遷に重点をおいたものである。こうしたなかで、植物遺体の複数の部分を総合し、植生史研究の問題点を抽出しようとする論文（たとえば、辻・南木・鈴木：栃木県南部、二宮町における立川期の植物遺体群集 1984や宮地・能城・南木：富士火山1707年降下火砕物層直下の埋没林の復原 1985など）、乾陸上の植生史研究の新しい材料である植物珪酸体の領域の開拓を図る論文（たとえば、佐瀬・加藤：現世ならびに埋没火山灰土腐植層中の植物起源粒子—とくに植物珪酸体に関する研究（第I, II報）1976、近藤・佐瀬：植物珪酸体、その特性と応用 1986）、あるいは現世の花粉の散布・堆積機構を解明しようとする論文（たとえば、松下：播磨灘表層堆積物の花粉分析—花粉組成と現存植生の比較 1981、佐々木：植生の異なる地域に発達する湿原の表層堆積物の花粉組成の比較 1986）のような基礎と応用両面の方法を開拓し、方向性を模索する研究が増してきたことは特筆すべきであろう。

第四紀という時代は、氷期・間氷期という気候や海面などの周期的な諸変動と人類の出現・繁栄によって特徴づけられると言ってもよい。今日までの第四紀研究では、前者の環境変動に関する植生史研究は依然主流を維持しているようであるが、後者の人類との関連では意外に限られているようである。1970年代後半には大規模土地改変に伴う遺跡発掘が盛んに行われるようになり、考古学と自然科学との共同の調査がもたれる機会も急増したため、遺跡発掘の報告書には多くの成果が収録されるようになってきた。ただ残念なことは、それら多くの成果が「第四紀研究」にはあまり反映されてこないことである。また、第四紀の植生史研究が環境変動論にとらわれるあまり、植物の形質上の変化や分化の過程や機構については、那須：植物相からみた日本の中期更新世 1980、亀井・ウルム氷期以降の生物地理総研グループ 1981などわずかな論文を除いては触れてこられなかったことは、これからの第四紀研究を考えるとき無視できない。

日本の第四紀学会の国際的な活動や関連する他学会との交流を司るものに、日本学術会議第四紀研究連絡委員会がある。この委員会はいくつかの研連付置小委員会をもつが、そのうち「アジア・太平洋地質層序小委員会」は植生史に関するものである。第四紀研究に関するもので、本委員会が編集にあたったものに“Recent Progress of Quaternary Research in Japan”がある。これは“Recent Progress of Natural Sciences in Japan”の一部をなすもので、すでに Vol.6 (1981) と Vol.11 (1986) に特集され、発行された。ちなみに、Vol.6 には“Flora and fauna (by Keiji SUZUKI and Tadao KAMEI)”が、また Vol.11 には“Recent progress of palynology in Japan, with special reference to the Middle and Early Pleistocene (by Kankichi SOHMA)”が収録されている。

日本第四紀学会に関する出版物は、学会機関誌「第四紀研究」と上記の“Recent Progress of Quaternary Research in Japan”のほかに主に次のようなものがある。

「日本の第四紀研究 その発展と現状」日本第四紀学会編、東京大学出版会、415 p. (1977) 5800 円：これ

は日本第四紀学会創立20周年を記念する事業の一つとして刊行されたもので、最初の日本第四紀学会史のほかに26の論説が盛り込まれている。このうち植生史に関わるものは、粉川：植物群の変遷と宮脇：植生の変化と人間活動の2篇である。付：資料集には、現在と最終氷期最盛期（2.5～1.5万年前）の植生帯（塚田，1974）と自然植生と都市の発生年代（宮脇）が盛り込まれている。日本第四紀学会史には INQUA 日本支部時代と過去20年間の学会史が9ページにわたって詳述されており、日本学術会議第四紀研究連絡委員会との関連についても述べられている。

「INQUA 日本支部連絡紙 No.1-12 (1952-1956) 復刻版」日本第四紀学会幹事会編，日本第四紀学会，258 p. (1986) 2000 円：これは学会創立30周年の記念出版物の一つである。INQUA 日本支部連絡紙は表紙・本文ともすべてが印刷で質素なものであるが、境界領域としての第四紀研究に注ぐ情熱が節々に感じられる。内容は談話会での講演の要旨が中心であるが、要旨とは思えないほどこつこつと書き上げられた論説もある。学会前史を知るうえで貴重な文献の一つである。

「日本第四紀地図」日本第四紀学会編，東京大学出版会，四六全判4葉（8-16色刷），解説書110 p. (1987) 12000 円：これも学会創立30周年の記念出版物である。地図は1/100万の地形・地質・活構造図と1/400万の先史遺跡・環境図からなる。解説書は、上記2種類の縮尺地図に対応させた第Ⅰ部と第Ⅱ部からなり、第Ⅰ部では地層やテクトニクスなど11項目についての解説が、第Ⅱ部では自然環境の変遷について7項目と人類活動の軌跡について4項目の解説がつけられている。第四紀研究は多岐にわたるので、地形のようにもともと地図に表現し易いものもあるが、非常に困難なものもある。地図に表わせるかどうかはまた、各領域の到達レベルにも大いに関係する。地図を描く場合にはとにかく表現し易いものを基準に書かれ、立ち後れた分野は強制を強いられることもよくある。その意味において、この第四紀地図も、これを見れば第四紀の様相が分かると決めてかからず、いろいろの領域の問題点が如実に語られているという見方も忘れてならないであろう。ともあれ、編集委員34名、編集協力者74余名という編集陣からなる本地図は、第四紀はもとより第四紀研究のさまざまな側面を理解するのに役立つことはいうまでもない。

(辻 誠一郎)